

『日台大辞典』 付載『日台字音便覧』 について

中澤 信幸

(文化システム専攻言語科学領域担当)

はじめに

かつて日本が台湾を統治していた時代に、いくつかの日本語と台湾語の対訳辞書が作られた。明治四〇年(一九〇七)に刊行された『日台大辞典』はその代表的な存在であるが、その「緒言」には台湾語だけでなく中国語諸方言についてのさまざまな考察が書き記してある。これを見ると、当時の編纂者たちの言語研究に対する強い意欲が感じられる。また巻末には「日台字音便覧」という漢字音対照表が付載されるが、これも日本漢字音と台湾語音とを総合的に対照させようとした意欲的なものである。しかしながら、戦後この辞書の存在自体が忘れ去られてしまった。最近になってこの辞書の語彙に対する考察は行われ始めているが、『日台字音便覧』についての考察はいまだ皆無である。本稿では『日台大辞典』における漢字音に関する記述、および『日台字音便覧』を見ていく中で、言語研究史上における本書の意味について考察する。

一 『日台大辞典』 について

一・一 『日台大辞典』の編纂

日清戦争が終結し、その後の講和条約で日本が台湾を統治することになったのは、明治二八年(一八九五)のことである。その後統治上の必要から、現地台湾語(閩南語)の研究が行われた。その成果として、次のような日本語と台湾語との対訳辞書が出版されている。

『日台小字典』 上田万年・小川尚義主編。台湾総督府民政部学務課発行。明治三二年(一八九八)刊。

『日台新辞典』 杉房之助編。日本物産合資会社支店発行。明治三七年(一九〇四)刊。

『日台大辞典』 小川尚義主編。台湾総督府民政部総務局学務課発行。明治四〇年(一九〇七)刊。

『日台小辞典』 小川尚義主編。大日本図書株式会社発行。明治四一年(一九〇八)刊。

『台日新辞書』 東方孝義編。台湾総督府警務局内台湾警察協会発行。昭和六年(一九三一)刊。

『台日大辞典』 小川尚義主編。台湾総督府発行。昭和六、七年(一九三二～三三)刊。

『台日小辞典』 台湾総督府編・発行。昭和七年(一九三二)刊。
『新訂日台大辞典』 上巻 小川尚義主編。台湾総督府。昭和一三年(一九三八)刊。

これらの辞書の中でも代表的なものが『日台大辞典』と『台日大辞典』で、⁽¹⁾いずれも台湾総督府の編修官だった小川尚義の主編によるものである。

『日台大辞典』の編纂は、明治二九年(一八九六)に当時の台湾総督府学務部長だった伊沢修二が計画したことに始まる。そして七月に学務部編纂課長だった神津仙三郎によって、マクゴワン(J. MacGowan)の

『英厦辞典』(English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect)の翻訳が始められた。同じ頃小川は『日台小字典』の編纂に取りかかり、こちらは明治三十一年(一八九八)二月に出版された。ところがその途中の明治三〇年(一八九七)八月、神津はマコワンの前半を訳したところまで病没してしまふ。『日台小字典』完成後、小川は神津を引き継ぎ、八ヶ月かけてマコワンの後半を訳す。続けてダウグラス(C. Douglas)の『厦英辞典』(Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy)を一年かけて訳出した。こうして台湾語に関する資料を集めた後、大槻文彦『言海』、ヘボン『和英語林集成』等といった資料から日本語約五万語を選定し、これらを組み合わせて辞書編纂を進めていった。明治三八年(一九〇五)によろやく脱稿したといふので、神津が最初に編纂に取りかかってから実に九年の歳月が費やされたことになる。その後明治四〇年(一九〇七)三月に『日台大辞典』は出版された。⁽²⁾

一・二 『日台大辞典』の構成

『日台大辞典』では冒頭に伊藤博文による題字、台湾総督府民政長官の後藤新平による序文が付けられ、「台湾言語分布図」、「台湾語数詞比較表」の後に「日台大辞典緒言」が二二二頁にわたって付けられる。この「緒言」は台湾語に関する精緻な研究となっており、中国語研究史上で

(1) 『日台大辞典』は明治時代の刊行である上に、復刊などもなされていないため、現在では入手は極めて困難である。本稿では筑波大学附属図書館蔵本による。本書はまた国立国会図書館のサイト <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/869489> および台湾のサイト <http://rug.csie.dahan.edu.tw/memory/TGB/thak.asp?id=179> でも閲覧は可能である。台湾では一九九三年に武陵出版より複製が出されている。『日台大辞典』については、一九八三年に国書刊行会より『台湾語大辞典』として複製が出されている。

(2) 『日台大辞典』巻末「本書編纂ノ顛末」(小川尚義執筆)による。また村上嘉英(一九六六)および(二〇〇四)参照。

も特筆されるべき内容といえる。その後「台湾語ノ発音」が一八頁にわたって付けられ、「凡例」の後に本編である「日台大辞典」が続く。本編は一八四頁におよぶが、その後に「日台字音便覧」が六六頁にわたって続く。その後「百家姓」、「台湾地名」、「旧台湾度量衡 附貨幣、時間」、「血族ニ対スル称呼」と続き、最後に小川尚義による「本書編纂ノ顛末」で終わる。⁽⁴⁾

一 『日台大辞典』の漢字音と台湾語

二・一 「緒言」における記述

一・二で述べたように、「緒言」では台湾語に関する精緻な記述が行われている。その中で台湾語を中国語諸語と比較するにあたり、「韻鏡」の枠組みを利用することが述べられる。

南部福建語ノ音韻上ノ特徴ヲ研究スルニ當リテハ、勢支那各種ノ語音ヲ比較スル必要アリ、今此等比較ノ基礎トシテ、主トシテ韻鏡ヲ取レリ、蓋シ韻鏡ノ音ハ必ズシモ、支那語ノ最古音ヲ表スルモノニハアラザレドモ、尚其音韻ノ種別ニ於テ頗ル精密ニシテ、比較上、最モ便利ナルモノアルヲ以テナリ、(六頁)

『韻鏡』は中国の唐宋・五代頃に作られたものと推定され、南宋の一六一一年に張麟之によって刊行されている。日本では信範(一二三三〜一二八六または一二八七)によって初めて注釈された。江戸時代にはこの書は大流行となり、文雄『磨光韻鏡』(延享元年刊、一七四四)を始

(3) 「緒言」の台湾語研究についての詳細は村上(一九六六)および(二〇〇四)参照。

(4) 『日台大辞典』に関係する先行研究は決して多くない。その中で林美秀(二〇〇六)および(二〇〇七)は、『日台大辞典』の語彙について調査したものであり、注目される。林によれば、『日台大辞典』で挙げられた語彙には、編纂者小川尚義の出身地である愛媛方言が含まれているとのことである。

めとして幾多もの版本・研究書が出版された。明治時代に入ってから『韻鏡』の研究はさまざまな形で行われているが、この『日台大辞典』は『韻鏡』を利用して中国語諸方言の分析を行っているという点で、『韻鏡』研究史上でも特筆されるべきものといえよう。

二・二 「凡例」における記述

本編に先立つ「凡例」では、大まかに次のようなことが述べられる。本書は現今日本において行われる談話語、文章語の中から「最モ普通ナルモノ」約四万二千余言を採り、これに台湾語の対訳を施したものである。

・訳語に採用した音は、主として廈門音を標準とする。廈門音は漳州音、泉州音の中間に位置するので、この両者の特質を併せ持っている。かつ五十音の字によって比較的容易に発音を表すことができる、便利な音だからである。

・日本語の仮名遣いはすべて「発音的仮名遣」により、片仮名を用いてこれを表す。そして現今の発音が「本来ノ仮名遣」に合わないもの限り、別に平仮名でこれを注す。

・福州、客人、広州、温州、寧波、北京、および朝鮮、安南語の音は「ジャイルス」氏の辞書（A Chinese English Dictionary, H. A. Giles）により、上海、南京語の音は「ウヰリナムス」氏の『漢英韻府』（A Syllabic dictionary of the Chinese Language, S. W. Williams）による。それらの発音を表す文字も原書に従う。ただし廈門、漳州、泉州語の発音を表すのに用いる文字は、編者の考案による。また漢音・呉音の仮名遣いは主として太田全斎『漢呉音図』によるが、多少の変更をしたところもある。

以上によれば、編纂者は中国語諸語を引くにあたって Giles や Williams の辞書を参照している。それとともに、日本漢字音に関しては太田

全斎『漢呉音図』（文化二二年成、一八一五）を参照しているという点が目玉を引く。これは本書が江戸時代以来の『韻鏡』研究の流れを受け継いでいることの証といえよう。

二・三 背景にある韻学

本書は明治時代の植民地政策の中から生み出されたものであり、いわば国家の総力を挙げて編纂されたものである。その中で江戸時代以来の『韻鏡』研究等の韻字が受け継がれていたことは、やはり特筆されるべきことであろう。とはいえ、江戸時代の『韻鏡』研究にもさまざまなものがあり、また「字音仮名遣い」もいくつかの段階を経ている。はたして本書では、「凡例」にあるように太田全斎を受け継いでいるのかどうか、興味が持たれるところである。

三 「日台字音便覧」について

三・一 先行研究

「日台字音便覧」（以下「字音便覧」と略称）は『日台大辞典』本編の次に付載されるものであるが、これに関して何らかの言及をしているのは、次の洪惟仁（一九九三）のみである。

後附 日臺字音便覧 羅列漢字的日語吳音・漢音・俗音及閩南語廈門・漳州的文白異讀、是閩南語漢字音讀的重要史料。只可惜未能列出泉州音、否則價值當更高。

ここでは「字音便覧」について次のように述べられる。「漢字の日本吳音・漢音・俗音および閩南語廈門・漳州の文語音と白話音の異読を羅列しており、これは閩南語の漢字音読の重要な史料である。ただ残念なことに泉州音を載せていない。これがあればさらに史料の価値は高まったはずである。」

この指摘にあるように、「字音便覧」は台湾語・閩南語の資料として

もつと注目されてもよいものである。しかしながら、他にこの「字音便覧」について言及した先行研究は見当たらない。

三・二 凡例について

その「字音便覧」であるが、冒頭部分に次のような箇条書きがある。

題名は特に記されないが、内容としては凡例と言つべきものである。

一、漢字ノ上ニ附シタル數字ハ其字ノ全畫數ヨリ見出ノ漢字ノ畫數ヲ減シタルモノナリ

一、漢字ノ下ニ附シタル假名ハ普通、右方ハ漢音、左方ハ吳音ヲ表ハセドモ屢俗音ヲ混ヘ出セル所アリ

一、韻字ノ四隅ニ附シタル圓圈ハ四聲ヲ示ス

一、韻字ノ下ニ附シタル假名ハ右方ハ廈門音、左方ハ漳州音ニシテ第一段ハ讀書音、第二段以下ハ俗音ヲ表ハス、而シテ、其一行ナルモノ、或ハ二行ニシテ括弧ヲ施セルモノハ廈門、漳州共通ノ音ナルコトヲ示ス

一、漳州音ニシテ鼻的音「イオ」ノ韻ヲ有スルモノハ別ニ之ヲ區別セズ、又廣キ（ ）ノ韻ヲ有スルモノハ凡テ「エ」ノ假名ヲ用ヅタリ、（緒論、漳州語ノ特徴ノ條参照）

最後の項にある「緒論」は「緒言」の誤りであろう。

なお、『日台大辞典』巻末には編纂者小川尚義による「本書編纂ノ顛末」が載せられるが、そこには

此他、本書ノ巻首ニ附シタル臺灣言語分布圖、同言語表、臺灣語ノ發音、及び巻尾ニ附シタル日臺字音便覧ハ予ガ起稿ニ係リ、

という記述がある。これによれば「字音便覧」は小川尚義自身によって編集されたということになる。

三・三 「日台字音便覧」の内容

三・三・一 構成

この「字音便覧」であるが、正式な名称は「引日台字音便覧」である。この名称のように、「字音便覧」では漢字が部首の画数順に排列される。

「字音便覧」は全部で六六頁、一頁あたり六段、一段あたり一九行の構成となっており、一行ごとに一字の掲出漢字、および漢字音等が掲載される。掲出漢字は全部で七、二七七字におよぶが、三五二字については「同」。「俗」字のような異体字注記となっており、音注は付されない。したがって音注が付される字は六、九二五字となる。

三・三・二 画数と掲出漢字

三・二に挙げた「字音便覧」凡例では、「漢字ノ上ニ附シタル數字ハ其字ノ全畫數ヨリ見出ノ漢字ノ畫數ヲ減シタルモノナリ」とあった。ここでいう「見出ノ漢字」とは部首のことである。つまり最初に部首を見出しとして掲げ、その後その部首に所属する漢字を排列するという構成である。排列順は部首所属字の中での画数順で、全画数から部首の画数を除いた数字を掲出漢字の上に付している。ただし同じ画数の漢字が続く場合には、先頭の漢字にのみ数字を付し、その後は省略している。掲出漢字は基本的にはその当時通用していた正字（旧字体）による。ただし前述のように異体字も適宜載せており、そこには「同」「俗」字のような注記が付される。

三・三・三 日本漢字音

「字音便覧」凡例には「漢字ノ下ニ附シタル假名ハ普通、右方ハ漢音、左方ハ吳音ヲ表ハセドモ屢俗音ヲ混ヘ出セル所アリ」とあった。ここで述べられるように、掲出漢字の下側に日本漢字音が示される。二行の場

合は右側が漢音、左側が呉音となるが、一行のみのもの(漢呉共通音)も多い。「俗音」については特に明示はされていない。二・二で述べたように、『日台大辞典』の「凡例」では、漢音・呉音の仮名遣いは主として太田全斎『漢吳音図』によるが、多少の変更をしたところもあることが述べられていた。ここでいう「俗音」とは、その『漢吳音図』とは異なる漢字音を指すのであろうか。

なお「字音便覧」の漢音形・呉音形の問題については、四で改めて検証する。

三・三・四 韻

日本漢字音の下には韻が示されるが、この韻は『広韻』の二〇六韻ではなく、平水韻(詩韻)の一〇六韻によっている。ただし具体的にどの韻書によったかは不明である。「字音便覧」凡例にもあるように、声調(四声)は韻字の四隅に付される点(白丸の圏点)によって示される。⁽⁵⁾この声調には時に明らかなミスも見受けられるので、注意が必要である。

三・三・五 台湾語音

「字音便覧」凡例にもあるように、韻字の下には台湾語音が片仮名で示され、声調符号も付される。⁽⁶⁾台湾語の発音は読書音(文読音)と俗音

(5) 「八 點韻・平声」(四頁四段一行、點韻は本来は入声)、「勒 職韻・去声」(六頁二段二行、職韻は本来は入声)、「咽 屑韻・平声」(八頁三段九行、屑韻は本来は入声)、「酒 有韻・平声」(五八頁一段四行、有韻は本来は上声)、「齊 齊韻・上声」(六六頁四段一四行、齊韻は本来は平声)等。

(6) 台湾語音の表記として、通常の「五十音假名」だけでなく、「新造ノ符號假名」も用いられる。また「新造ノ符號」として、「出氣音符號」(有気音を表示)および「八聲符號」(声調を表示)も用いられる。これらは「台湾語ノ発音」の項で解説がなされるが、ここでは「右新造ノ符號假名」及び符號八元學務務長伊澤修二氏ノ製定セル所ナリ」と記される。これは台湾總督府学務部より明治十九年(一八九六)に出された「訂正台湾十五音及字母表」(台湾十五音及字母詳解)、および明治三四年(一九〇一)に出された「訂正台湾十五音及字母詳解」を指す。詳細は村上(一九六六)および(二〇〇四)参照。

(白話音)の二層に分かれるが、ここでは第一段に読書音、第二段以降に俗音が示される。二行に分かれている場合、右が廈門音、左が漳州音である。⁽⁷⁾一行の場合または二行でも括弧()で括られている場合には、廈門・漳州共通の音であることを示す。

四 「日台字音便覧」の漢音形・呉音形

四・一 漢音形・呉音形と「字音仮名遣い」

三・三・三でも述べたように、「字音便覧」では日本漢字音の漢音・呉音が併記されている。この漢音形・呉音形は江戸時代の『韻鏡』研究で整備されてきた「字音仮名遣い」によっているものと考えられるが、二・三でも述べたように「字音仮名遣い」もいくつかの段階を経ており、決して一枚岩ではないのである。

ここでは「字音便覧」のいくつかの漢音形・呉音形を取り上げ、「字音仮名遣い」研究の草分けともいえる文雄の『磨光韻鏡』、および『日台大辞典』の「凡例」にもその名があった太田全斎の『漢吳音図』とを見比べることによって、その性格について検証していくことにしよう。⁽⁸⁾

四・二 豪韻唇音

豪(皓・号)韻所屬字については、古文獻では「a u」形の字音となるが、唇音字のみが「o u」形の字音となることが知られている。これが他と同様に「a u」形に統一されていくのは、江戸時代に入ってからのことである。⁽⁹⁾文雄『磨光韻鏡』第二五転では漢音・呉音ともに

(7) 台湾語のルーツは福建省南部で話される閩南語、特に泉州方言と漳州方言とに求められる。「字音便覧」では福建省の都市である廈門の発音と漳州の発音とを載せているが、泉州の発音は載せていない。この点が三・一で紹介した洪(一九九三)で批判されている。なお二・二で挙げたように、『日台大辞典』の「凡例」では、廈門音は漳州・泉州の両方の音の特質を併せ持つものとしていた。

(8) 『磨光韻鏡』は勉誠社文庫90、『漢吳音図』は勉誠社文庫57による。
(9) 有坂秀世(一九四二)参照。

「a u」形となっているが、『漢吳音図』第二五転では漢音は「原音 i a u / 次音 a u」形、吳音は「原音 i o u / 次音 o u」形となっている。⁽¹⁰⁾

さて、「字音便覧」においては豪韻唇音字は

保ホハウ (三頁一段一行) 報ホハウ (一〇頁五段六行)

寶ホハウ (一三頁五段一五行) 帽モハウ (二五頁三段一八行)

のように、漢音は「a u」形、吳音は「o u」形で現れる。ここでは『漢吳音図』の「次音」を承けていることが容易に想像できる。

四・三 齊韻開口

齊(齊・霽)韻開口所属字については、古文獻では漢音系・吳音系に拘わらず「e i」形と「a i」形とが混在している。江戸時代に入つて『磨光韻鏡』第一三転では、舌音・齒音・来母は漢音「e i」形、吳音「a i」形としているのに対して、唇音・牙音・喉音は漢音・吳音とも「e i」形としている。一方『漢吳音図』第一三転では、漢音は「原音 e i / 次音 i」、吳音は「原音 a i / 次音 i」としている。⁽¹¹⁾

さて「字音便覧」においては、齊韻開口字は次のように現れている。

倪ニガイ (三頁三段六行) 泥ニガイ (二九頁一段一五行)

謎ミガイ (五三頁三段一五行) 迷ミガイ (五六頁六段六行)

逮ダイ (五七頁一段一五行) 醯サイ (五八頁一段一五行)

題タイ (六二頁三段一三行) 黎レイ (六六頁一段一五行)

齊サイ (六六頁四段一四行)

牙音・齒音・喉音・来母は漢音「e i」形、吳音「a i」形となつ

ている。それに対し、唇音は「謎」では漢音「e i」形、吳音「a i」形となっているものの、「迷」では漢音・吳音ともに「e i」形となっている。一方舌音では、「泥」のように漢音「e i」形、吳音「a i」形となっている場合もあれば、「逮」のように漢音「a i」形、吳音「e i」形となっている場合もあり、「題」のように漢音・吳音とも「a i」形となっている場合もある。この齊韻開口字に関しては、『磨光韻鏡』にも『漢吳音図』にも完全には従っていない。それぞれの字に応じた判断がなされているようである。

四・四 東韻三等

東(送)韻三等所属字については、『磨光韻鏡』第一転では、漢音は「u u」「o u」「i u」「y u u」形、吳音は「u」「y u」「o」形としている。一方『漢吳音図』第一転では、漢音は「原音 y u u / 次音 u u」、吳音は「原音 y o u / 次音 o u」としている。

さて「字音便覧」においては、東韻三等字は

中チュウ (一頁二段一・二三行) 充シュウ (四頁二段一八行)

弓キウ (一六頁三段一四行) 隆リュウ (六〇頁五段一八行)

のように漢音は「y u u」形、吳音は「y o u」形で現れる。ここでは『漢吳音図』の「原音」を承けていることが容易に想像できる。ただし『漢吳音図』では、「中」の吳音原音は「ツヨウ」となっている。「字音便覧」では他の東韻三等字に合わせて「チュウ」と整理していると考えられる。

(10) 『漢吳音図』では漢音・吳音をさらに「原音」「次音」に分けて示している。「原音」を反切と見なして導き出されるのが「次音」である。

(11) 中澤(二〇〇九)参照。

四・五 明母・泥母

明母・泥母所屬字については、「字音仮名遣い」では吳音はマ行（「明ミヤウ」「寧ニヤウ」等）、漢音はバ行（「明ベイ」「寧テイ」等）とされ、「明メイ」「寧ネイ」といった字音は漢音・吳音とも異なる「慣用音」として扱われた。『磨光韻鏡』では、「明」（第三三転）は漢音「ベイ」、吳音「ミヤウ」、寧」（第三五転）は漢音「テイ」、吳音「ニヤウ」としている。また『漢吳音図』では、「明」（第三三転）は漢音「原音ヒエイノ次音ベイ」、吳音「原音ミヤウノ次音マウ」、寧」（第三五転）は漢音「次音テイ」、吳音「原音ニヤウノ次音ナウ」としている。

ただし漢音系の古文獻には「明メイ」「鳴メイ」「命メイ」「名メイ」「寧ネイ」といった字音が實際に存在しており、昭和に入ってこれらの字音も漢音として認めるべきであるという主張がなされるに至った。¹²⁾ さて「字音便覧」においては、これら明母・泥母字は次のように現れている。

名 <small>ミヤウ</small>	命 <small>ミヤウ</small>
（七頁五段六行）	（八頁一段一六行）
寧 <small>テイ</small>	明 <small>テイ</small>
（一三頁五段六行）	（二三頁四段四行）
鳴 <small>ミヤウ</small>	
（六五頁二段四行）	

明母については漢音で「メイ」という音形を認めており、ここでは「字音仮名遣い」に固執していない。

三・二で挙げた「字音便覧」凡例では「屢俗音ヲ混へ出セル所アリ」と述べていた。この「俗音」とは、「明メイ」のような「字音仮名遣い」とは異なる「慣用音」を指しているものとも考えられる。

一方泥母の「寧」についてであるが、こちらは「ネイ」を吳音としている。やはり「俗音」をこちらは吳音として出したのであろうか。

四・六 『漢吳音図』との関係

二・二で挙げた「凡例」にもあったように、『日台大辞典』の漢音・吳音が『漢吳音図』を承けているのは確かである。ただし「字音便覧」の漢音形・吳音形を個別に検証した結果、『漢吳音図』とはあえて変えている字音があることも明らかになってきた。特に「俗音」の扱いについては編纂者の意図が反映されている点でもあり、さらに検証する必要がある。

五 言語研究史上における「日台字音便覧」の意味

五・一 伝統の継承と時代の要請

『日台大辞典』は西洋の辞書を下地にしており、かつ台湾領有という時代の要請の中で生まれてきたものである。その意味ではまさに「近代の産物」である。しかしながら、そこには漢字音韻学や『韻鏡』研究等の伝統も受け継がれている。これは西洋の言語学と日本の国学との融合の中で、近代の「国語学」が生まれてきた状況と似ている。この『日台大辞典』における言語研究を検証することで、当時の言語学の状況をさらに明らかにすることが可能であろう。

「字音便覧」もその目的は日本漢字音と台湾語音との対照であり、やはり時代の要請に合わせた実用的なものである。しかしながら、そこでは江戸時代以来の『韻鏡』研究や「字音仮名遣い」研究等の伝統が多分に生かされている。つまり学問の伝統を継承しつつ、時代の要請に合わせて新たに実用的な字音表を作り出したということである。これは漢字音韻学史上でも見過ごせない事実である。

五・二 対照研究としての「日台字音便覧」

「字音便覧」は実用的な目的で作られたものであるが、その結果として行われたのは、漢字を媒介とした日本語音と台湾語音との大規模な対

(12) 有坂（一九四〇）。

照研究である。これも言語研究史上特筆すべきことといえる。

またこの「字音便覧」は現代の日台対照研究にも適用することが可能であり、さらに中国語諸方言や朝鮮漢字音・越南漢字音を含めた、東アジアの漢語全般の対照研究にも応用できるのである。その意味で、この「字音便覧」には無限の可能性が秘められているといっても過言ではない。¹³⁾

おわりに

以上、「字音便覧」について現時点でわかっている限りを述べてきた。その中で漢音形・呉音形については、基本的に『漢吳音図』を承けているものの、そうでない場合もあることが明らかになった。しかしその基準については、本稿では十分に明らかにできなかった。また「字音便覧」凡例にいう「俗音」の実態についても、いまだ説明はできていない。いずれも今後に残された課題である。

また「字音便覧」記載の台湾語音の性格の解明、さらには日本漢字音と台湾語音との対照についても、これからの課題として残されている。いずれも他日に期することにして、筆を擱くことにしたい。

引用文献

- 有坂秀世（一九四〇）『メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか』（音声学協会会報）64、『国語音韻史の研究』増補新版』所収、三省堂、一九五七）
- 有坂秀世（一九四二）『帽子』等の仮名遣について（『文学』、『国語音韻史の研究』増補新版』所収、三省堂、一九五七）

¹³⁾ この「字音便覧」については、安西順仁、井島奈津美、呉佩珊、田中咲由里、中沢浩太の諸氏の協力により、データベース化が完了している。今後その成果を公開していく予定である。

洪惟仁（一九九三）『日據時代の辭書編纂』（閩南語經典辭書彙編7

臺日大辭典 上巻』所収、武陵出版有限公司）

中澤信幸（二〇〇九）『音韻字に対する字音注の変遷について』（『国文学』202）

村上嘉英（一九六六）『日本人の台湾における閩南語研究』（『日本文化』45）

村上嘉英（二〇〇四）『日本人の台湾語学習と研究の事始め』序に代

えて（王順隆編『新編台日大辞典』所収）

林美秀（二〇〇六）『日台大辞典』の方言語彙（『岡大國文論稿』34）

林美秀（二〇〇七）『日台大辞典』の語彙の特色』音韻面からの一

考察（『岡大國文論稿』35）

付記 本稿は平成二二年度山形大学・結城プラン「科学研究費補助金に関する若手教員研究助成」、および平成二二年度山形大学人文学部「独創的・萌芽的研究支援」による研究成果の一部である。

On *Nittai Jion Binran*, Included in *Nittai Daijiten*

NAKAZAWA Nobuyuki

(Associate Professor, Linguistic Sciences, Cultural Systems Course)

Nittai Daijiten, which is a Japanese-Taiwanese Dictionary, includes *Nittai Jion Binran*, a contrastive table of Sino-Japanese and Taiwanese pronunciation. This table has been almost forgotten today, and there are no publications regarding it. In this paper, we research descriptions of Chinese phonology in this dictionary, and examine the contrastive table, while considering the significance of this dictionary on historical linguistics. In *Nittai Daijiten*, the readings of *Kan-on* and *Go-on* depended on *Kango Onzu*, written by Ōta Zensai in 1815. However, now we can find new readings by searching *Kan-on* and *Go-on* in this table. These readings might have been put as *Zoku-on*, which is colloquial pronunciation, by the compiler. *Nittai Daijiten* and *Nittai Jion Binran* were compiled under the colonial policy. But in this dictionary, the traditional studies of *Inkyō* and *Jion-kanazukai* from the Edo era are inherited. In compiling *Nittai Jion Binran*, they contrasted between the Sino-Japanese and Taiwanese pronunciations by using Chinese characters on a large scale. This fact is worthy of special mention in historical linguistics. This contrastive table can be applied to modern contrastive linguistics between Sino-Japanese and Taiwanese pronunciation. Further this table can be applied to contrastive linguistics of other East Asia languages, including Sino-Korean and Sino-Vietnamese. It is no exaggeration to say that this table has infinite possibilities.